

情報通信審議会 情報通信技術分科会 産学官連携強化委員会
重点課題WG（第7回）議事概要

1 日 時 平成22年3月15日（月） 13時30分～15時00分

2 場 所 総務省10階 共用10階会議室

3 出席者（敬称略）

構成員

森川博之（主任）、伊藤崇之、宇野嘉修、冲中秀夫、勝部泰弘、加納敏行、唐弓昇平、木下進、関口潔、谷口浩一、富永昌彦、西村信治、端山聡、森田温（代理：丹野興一）、横井正紀（代理：中林優介）

事務局

奥英之（技術政策課長）、藤田和重（同課企画官）、杵浦維勝（同課課長補佐）、藤井信英（同課課長補佐）、他

4 議事要旨

（1）重点研究開発課題の検討のまとめに向けて

事務局より、重-7-1及び重-7-2に沿って、産学官連携強化委員会への報告状況について説明があった後、重-7-3及び重-7-4に沿って、報告書骨子（案）について説明があった。

（2）ディスカッション

（1）の説明を踏まえ、ここよりディスカッションとなった。主な議論は以下のとおり。

富永構成員：重-7-4にあるプロジェクト例と重-7-1（p10）にあるWGとの関係はどのようなになっているのか。

事務局：現時点でこのプロジェクト単位でWGを設置することを決めているわけではない。

富永構成員：ということは、プロジェクトによってWGの中でガバナンスをきかせてやっていくものもあれば、これまでのフォーラムのように自由にやっていくものもあるということか。

事務局：国がどこまで関与するかにもよるが、民産学官が連携して重点的にやるべきものはWGのような形でやることになるかと思う。

富永構成員：重-7-4（p13、p14）の重点研究開発課題から重-7-4（p15～）のプロジェクト例へは滑らかに移行していないような気がする。

加納構成員：重-7-3で第1章の前半部分に、ICTがなぜ世の中の役に立つのかということを入れた方がよいのではないか。例えば、日常生活の至る所でICTが応用され人々の生活が豊かになるということを追加してはどうか。「ICTの研究開発はイノベーション創出の原動力」ということをうたわなければならない。

宇野構成員：重-7-3（p5）に災害・犯罪増加とあるが、交通事故数が高止まりしているということと、高齢者ドライバーが増加しているという現状も追加してはどうか。

伊藤構成員：重-7-4（p15～）の各プロジェクトと（p14）の重点研究開発課題との関係が分かりにくい。よく読めば分かるのかもしれないが、もう少し分かりやすくなるとうい。

宇野構成員：医療についてはプロジェクト例で介護ロボットが出てくるので、第1章で高齢者の医療費が多いということを追加してはどうか。

勝部構成員：重-7-3（p8～）に「ICT分野の技術動向」として6つの技術が並んでいるが、前の章の何かを受けてのものなのか、後の章で何かを言うためのものか、流れがよく分からない。

加納構成員：今並んでいる「ICT分野の技術動向」はこれまで技術指向で研究開発してきたものの成果である。今回言わなければならないのは、1つはこのようにシーズ指向で生まれた成果を社会実装のフェーズへ持っていく取組みが必要であるという

- こと。もう1つは、シーズ指向の成果についても引き続き創出されるような仕組みも必要であるということ。
- 森川主任 : それは報告書の目次案でいうと「Ⅱ-1 出口戦略の徹底」にあたる話かと思う。「徹底」と言ってしまうと、シーズ指向の技術がなくなってしまう恐れもある。
- 唐弓構成員 : 報告書の目次案では「Ⅰ-3 科学技術政策の状況」となっているが、状況や課題に加えて、今後の方向性なども強調してはどうか。
- 冲中構成員 : 重-7-3 (p12)にある現状の重点14技術とプロジェクトとのマッピングはやらないのか。
- 事務局 : 個別の課題としては大きく変わっていない。ただこれまでの反省として、技術シーズだけを軸に考えていたということがあり、今後は出口を軸にして柱立てしていくということをお願いする必要がある。個別の技術課題については1つ1つ対応させるというより、ある程度のグループで対応させられればよい。
- 宇野構成員 : 重-7-4 (p14)の技術課題とプロジェクトを対応させる形になるのか。
- 事務局 : 理想としては1つのプロジェクトの中でいくつかの技術課題が融合する形にまとめられればよい。そこはプロジェクトの作り方や書きぶりを工夫し、中にある技術課題が読める形にする必要がある。ただし、単独で技術開発に専念する技術課題もあり得るので、必ずしも全ての技術課題がプロジェクトに入るかは分からない。具体的にどう見せるのがよいかアイデアがあればいただきたい。
- 宇野構成員 : ロードマップのイメージがいくつか出ているが、追加してもよいのか。
- 事務局 : 可能である。
- 谷口構成員 : ロードマップのイメージで「国際展開戦略」とあるが、展開する主体が重要である。研究開発のアウトプットの国際標準化を担う機関があり、そこに責任を負わせるという形があればよいのではないのか。
- 事務局 : 国際標準化の取り組み方については、標準化を専門に行う人を活用すべきという意見と、技術の中身を知っている技術者にやらせるべきという意見がある。今後技術課題ごとのWGの中で研究開発と平行して標準化についても議論してもらう必要がある。
- 森川主任 : プロジェクトに農業のようなものは入らないのか。
- 事務局 : ICTの研究開発というよりは利活用やソリューションに近いのかと思う。
- 森川主任 : 先端技術が入らないようなプロジェクトも今後重要になるのではないのか。
- 事務局 : そのようなサービスのプロジェクトもあり得ると思う。
- 勝部構成員 : 重-7-1 (p8)で「研究環境のグローバル化」や「テストベッドネットワークの強化」とあるが、この部分に相当する技術が重-7-3や重-7-4にはあまりない気がする。また、現在のプロジェクト例の流れにそぐわないかもしれないが、既存の技術を用いて他国に必要な技術を提供していくというプロジェクト例もあってもよいのではないのか。
- 加納構成員 : テストベッドというと環境整備だけと思われがちだが、先端未来型の運用技術の研究の1つとして加えてもよいのではないのか。

(3) その他

今回の資料について追加の意見等があれば別途事務局へ送付することとし、意見を反映させた資料を3月23日開催予定の親委員会へ提出することとなった。

以上